小町風伝

少年風伝

太田省吾戯曲集

白水社

著者略歴
一九三九年中国済南市生れ
一九六二年学習院大学中退
転形劇場主宰
著書
『飛翔と懸垂』（一九七五年・而立書房）

小町風伝　太田省吾戯曲集

定価一五〇〇円

一九七八年五月二五日印刷
一九七八年六月六日発行

著者　© 太田省吾
発行者　中森季雄
印刷者　山岸晟
発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京九一三三二八
郵便番号　一〇一

三秀舎印刷・黒岩製本

(分) 0093 (製) 54200 (出) 6911

小町風伝

太田省吾戯曲集

装丁　大野　邦代
写真　田中　利勝
『硝子のサーカス』
杉崎　卓
『小町風伝』
『風枕』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目次

硝子のサーカス　5
小町風伝　87
風枕　145
あとがき　215

硝子のサーカス

登場人物

老婆　　芸人一
兄　　〃　二
夫　　〃　三
一郎　　駅弁売り
千代子（及び千代子とそっくりの子）　　お茶売り
二郎（及び二郎とそっくりの子）　　デパートの掃除夫
おばあさん　　〃　掃除婦
一郎の妻　　軍手の男一
医者　　〃　二
春子さん

密閉された部屋。
男が二人、死出の小舟である棺を担いであらわれる。
二人は軍手をつけている。したがって、彼らが触れ合うこととなってもそれは軍手越しであることになる。

男一　割れない硝子は硝子じゃないよ。
男二　終らないサーカス、サーカスじゃないよ。
男一　サーカス終えたら化粧をおとす。
男二　化粧壜をおとしたら硝子が割れる。
男一　硝子が割れたら……。
男二　サーカスが割れる。
男一　サーカス割れたら……。
男二　硝子を溶かす。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

男一　硝子が溶けたら……。
男二　サーカス溶ける。
男一　サーカスが溶けたら……。
男二　おしまい。
男一　おしまい。

男一、男二、棺を置く。

男一　女のひとだ。
男二　うん。
男一　幾つになるんだろう。
男二　八十歳。
男一　まさか、そんなことはないよ。
男二　というと。
男一　うん……ただちょっと、まさかって気がするんだ。

男二は棺の中の老婆へ手をのばす。
老婆の眼へのばすひとさし指が軍手から、チョンとのぞいている。

男一　……又やるのかい。
男二　ちょっとだけさ。
男一　いやだよ。
男二　……。
男一　いや、うん、ちょっとさ、いやなんだよ。
男二　……わからないんだよ……わからないもんで……。
男一　なにがわからないんだい。
男二　いや、いいからさ。
男一　……どうなんだい。
男二　……うん、そうか……。
男一　そうかって、どういう意味なんだ。
男二　うん……。
男一　かたいのかい。
男二　自分でやればいいじゃないかと思うんだよ、いちいち……。
男一　どのくらいのかたさかな……ユデ玉子ぐらいかな……ねえ。
男二　うるさいよ。
男一　おしえてくれないからだよ。

男二　……なんだって……自分でやれっていってるんだ。

男一　自分のはやってみたよ。きみはよくそうやって眼に触わるだろう。なぜだろうって。どうしてもおしえてくれないからね。かたさをみているんだろうと思うんだ。……ちがったっていいのさ、おれはとにかくそう思ったんだ。で、家でちょっとやってみたんだ。普通はちょっとどんなもんだろうってね。ユデ玉子ぐらいのかたさかなってぼんやり予想してたんだ、やる前は。でも、実際やってみると案外やわらかいもんでね、ナマ玉子ぐらい、ちょっとナマ玉子の黄身ぐらいにやわらかかったよ、そんな感じだった。ナマ玉子に小さな穴をあけてね、こう指をつっこんでみたらね、ああ、こっちの方がちょっと似てるって思ったよ。ね、眼玉なんていうから、こうゴロッと、玉子でも殻つきぐらいのが入ってるって、ちょっとそう思うだろう。ところがちがうんだなあ。ね、このひとのは、どんなんだい。

男二　だめなんだよ。

男一　だめって、なにがだめなんだい。

男二　玉子で考えていくと、わからなくなる……。

男一　だって、ちょって似てるぞ、玉子と。

男二　ちょっと黙っててくれ。

男一　ちょっと……うん。……やっぱりちょっといいかな……なにがわからなくなるんだい。きみはそうやってなにかをわかろうとしてるんだな。ね、そうだろう。

男二　ン？

男一　どしたんだい。
男二　……ちがった。
男一　どしたんだい、なにか思いついたんだね。
男二　ちがったんだ。これはまえに一度考えたやつだった。だめだったやつさ。
男一　なんなんだい、ちょっとおしえてくれないかな。
男二　だめだったんだよ。
男一　だめなやつでもいいからさ。
男二　いやだ。
男一　……わかるよ。だめな考えってのはほんとにだめなもんだからなあ。考えているときは夢中でわからないんだ。でもふっと気づくと、ちょっと、まるでだめなんだ。そのときは恥かしくてね、ちょっとがまんできないくらいだよ。まるでおれはちょっと低脳じゃないだろうかって、ね、ほんとにそう思えるのさ。もちろんきみのことをいっているわけじゃない、それはそうじゃない。だって、おれはさ、玉子で考えている段階なのに、きみはとっくの昔にそんな段階を通りすごしてるんだ。そうだろう。
男二　……。
男一　なにか、ちょっと哲学的なことなんだな。で、あいつにちょっとわからないと思って、あいつっていうのはおれのことさ、それでなにもおしえてくれないんだろ。
男二　……。

男一　ヤ？　わかったぞ。ちょっと待ってくれよ。ねえ、玉子はゆでるとかたくなるよな、熱を加えれば加えるほどかたくなる。でも、眼玉は焼くとなくなっちゃうなあ。……でもだよ、ねえ、玉子だって焼くと、ちょっとすごく焼くとなくなっちゃうんじゃないかな。どうだろう、ちょっとたとえばここみたいにしてさ……あれは不思議だね、なくなっちゃうんだから。髪の毛とかさ、こう、肉とかね、それはちょっとわかる気がするんだよ、なくなっちゃうだろうなあってね。でも、眼だからな、相手は。……ン？　うん、そうだ、そうだろう、こんなふうに考えるのが、つまりちょっとだめなんだろう。つまり、おれは科学的に考えてしまってるんだ。つまり、玉子で考えるというのはそういうことで、それでだめだというんだろう。目玉焼きからの発想だもんなあ、だめだとは思っていたよ。きみの考えている問題っていうのはちょっとそういうことじゃないんだ。わかったぞ、そこまでわかったぞ。……とすると、つまりどういうことかな。こう、たとえばこのひとの眼に触れる、とする……（女の眼に）なくなっちゃうんだね、そりゃそうだ、眼玉が焼け残ったら、それはちょっと死んだことにならないからね。そうだよ、お骨の中に眼玉があったら、みんなちょっと困るだろうからなあ。……とすると、眼玉をくりぬいておいてもさ、みんなだれもちょっとわからないわけだ。……ヤ、これはちょっとちがうことになってきたぞ。……そうか、うん。いや大丈夫だよ、きみ、どうせなくなっちゃうんだからさ、くりぬいたってだれにもわかりゃしない。……でも、とった眼玉をどうするんだい。

男二　そんなことじゃないよ。

男一　コップの中へ入れて観察するのかい、裏の池へ沈めるのかい。おれだったら、ねえ、針でさす

んじゃないかと思うんだ。おれはどうもそういうタイプの人間だって気がするんだ……こう、チクチクやるだろうなあ、それとも、金槌でガーンと……。

男二　さてと。

男一　ずるいよ、ここまできたのにさ。

男二　仕事をやろうじゃないか。

男一　にげるんだな。

男二　……。

男一　なぜひとの眼に触わったりするんだい。おれと組んだときにはかならずやるね。にげたりしなくたって、わかってるのさ。

男二　そんなんじゃない、ちょっとね。

男一　ちょっとどしたんだい。

男二　なにを感じてるのかなあってね、それだけさ、眼にさわってね、なにをおれは感じているんだろうって、それがね、よくわからないんだよ。玉子とくらべたってだめなのさ、それでね……。

男一　いいんだ。そうさ、いいんだよ。……そうだ、仕事をやろうよ、えっ、そうすりゃこの場をごまかせる。

男二　そりゃ、セツ子だって人間だ。

男一　なんだって。

男二　セツ子だって人間だ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook